物語日本文學

椿說弓張月

文學博士 藤村 作譯

214779

日文 701741550

文學博士 藤村 作 著

椿說弓張月

至文堂

昭和十年十月十日發行
昭和二十四年五月二十八日十九版發行

物語日本文學
椿説弓張月
定價金百三拾圓

譯者　藤村作

發行者　東京都新宿區拂方町二七　佐藤正叟

印刷者　東京都北區上中里町一五三　倉澤直男

發行所　東京都新宿區拂方町二七　至文堂
會員番號A一一九〇二〇番
電話九段(33)一四一五番
振替東京二九五〇七番

東京都千代田區神田淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社

刷印社文双

凡例

本書は、椿説弓張月を出來るだけ縮約して、その精神を明瞭にし、且つ説話の持つ怪奇的な面目を失はないやうに譯したものである。是に依つて、保元の亂の鎮西八郎、伊豆共の他に於て神に祭られた爲朝、琉球の大亂を平定しながら王位に即くことを辭退して昇天した武の英雄、德の高士としての面目を知らせようといふのである。

從つて、馬琴の文章の味とか、或は彼れ特有の考證癖の見えた點などは省いて、説話として終始一貫するやうに試み、一場面毎に成るべく纏めたいと注意した。

右の關係から、五篇二十八卷、六十八回といふ長篇を、五十回に改めて、その題目も、新たに適當なものを選んで附けた。

現代語譯は、創作的筆致を加へることなしに、あるがまゝに傳へようと努めた。殊に和歌、漢詩、手紙等は、原作のまゝその姿を殘して置いた。

目次

解說

一 成立……一
二 作者……四
三 題材……
四 構想……八

前篇

一 武藝の論……一三
二 木綿山の狩座……二〇
三 血氣の勇……二四
四 塔上の飛禽……二八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

五 糾へる繩……三四
六 異國の美人……三九
七 義心の一徹……四四
八 保元の强弓……四九
九 宰府の小夜嵐……五四
一〇 楊梅が瀧の怪……五八
一一 女丈夫の仇討……六四
一二 千貫旅館の夜襲……六八
一三 大島の德化……七二
一四 直島の伺候……七八

後篇

一五 女護の島渡り……八五
一六 夫婦の大倫……九一

一七 東海の二箭……九四
一八 苛政の誡……九九
一九 謫所の書……一〇三
二〇 紙鳶の苦計……一〇八
二一 忠孝の最期……一一三
二二 形見の弓箭……一一八
二三 逢日の浦……一二三
二四 白峰の御陵……一二七
二五 木原山の再會……一三三
二六 孝子の西下……一三九

續篇

二七 西海の再生……一四七
二八 國亂れて烈女現る……一五二

二九 奸計の露顯……一六〇
三〇 虹塚の朦雲……一六二
三一 琉球の二顆……一六五
三二 鏡中の幻術……一六八
三三 蘭芳徒に空し……一七一
三四 赤子を奪ふ……一七三
三五 禍獸の祟り……一七六
拾遺
三六 富藏の水……一八一
三七 朦雲の奸計……一八六
三八 孤獒命を保つ……一八九
三九 爲朝利勇と相結ぶ……一九二
四〇 機先を制せらる……一九六

四一 兩雄の秘術……二〇一
四二 島袋の危難……二〇六

殘篇

四三 巴麻島の仙童……二〇九
四四 姑巴島の再會……二一二
四五 一つ家の山妻……二一八
四六 天孫廟……二二四
四七 靈箭……二三〇
四八 三賢志を述ぶ……二三七
四九 夫婦の垂教……二四〇
五〇 八頭山の昇天……二四三

目次終

椿説弓張月

解説

一　成立

馬琴の小説を讀んで感じることは、第一に、他の作家に比べて、長篇が多いといふ事である。彼の南總里見八犬傳にしろ、朝夷巡島記にしろ、又、近世説美少年錄にしろ、なほ又、開卷驚奇俠客傳にしろ、皆長篇大作と言つてよからう。俠客傳の四集二十卷の如き、又は美少年錄の正續四十五卷の如き、或は巡島記の六輯三十卷の如き、浩瀚な作を續々と著はして居るが、殊にかの八犬傳に至つては、九輯百六卷といふ驚くべき大作なのである。是は彼が、精力絶倫の人であつたことを語る半面に、當時文壇の重鎮であつた事を、知り得られるであらう。彼が大家としての誇りと、その用意周到を以て、常に堂々たる陣を布き、文壇に君臨して、群

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

小作家を睥睨して居た觀が見える。彼の作品の內容なり思想なりに於て、又、その結構の井然たる點に於ても、彼の抱負は見えて居る。

今、こゝに取扱つた弓張月も亦、この例に漏れない一大長篇であり、且つ傑作である。殊にその思想が、彼の理想を最もよく具現して居る事、その結構が首尾一貫、井然として一絲亂れないで居るといふ事に於て、他の雄篇に比べて見ても、出色のものであつて、彼の代表作と稱して、決して恥かしくはない。尤も、馬琴の代表作としては、普通に、八犬傳とか、巡島記などが擧げられるが、是等も確かに、傑作には相違ないが、八犬傳には、結構の上に稍完璧とし難い感があり、巡島記に至つては、未完成の點があつて、第一の傑作と見做すには、多少遺憾に思はれないでもない。

さて、この弓張月は、正しくは鎭西八郎外傳椿說弓張月といふので、全部五篇二十八卷、六十有八回から成立つて居る。即ち、前、後、續の三篇は、各〳〵六卷十五回づつ、拾遺は五卷十一回、そして殘篇は五卷十二回である。その他に、後篇の卷末に、備考があり、拾遺篇の卷末には、金毘羅名號並安井金毘羅之事が附け加へられ、又、最後には、爲朝神社並南島地

名辨略が附錄となつて居る。そして、馬琴が三十九歳、即ち文化二年の春に、初めて筆を起して、文化七年の仲夏に脱稿、その間六ケ年といふ長い月日を費した苦心の結晶である。それに當時浮世繪畫家として名高い葛飾北齋の挿繪で、文化四年の春正月から市場に現はれたが、保元の亂に於ける快男兒源爲朝の一代記であり、又、その内容に相應しい北齋の強い版畫とが相俟つて、市井の間に歡迎され、愛讀されたものである。殊に續篇からは、場面が琉球に一轉して、その歴史、地理、風俗などが、文章に或は繪畫に、細しく寫出されて、一層の人氣を博したやうである。一體北齋は、馬琴によく似た性格の人で、浮世繪畫家としても、特殊的地位を占めて居た人である。彼は、終生貧乏でありながら、頑固であり、傲岸であつて、高蹈的でもあつた。また非常な努力家で、九十歳で歿するまで、筆を放さなかつた事も、馬琴の生涯と頗る似たものがある。なほ又、その畫には、一種の性癖があつて、誇大性といふか、人の意表に出る畫題を擇んで、その主要な點を誇張して描いて居る。言はば、人生なり自然なりを、有るがまゝに描かうといふ寫實的態度ではなしに、ある理想の下に、彼の主觀を表現して居るのである。而もその筆致は、強い力と活動性に富んで居るのが特色で、是等は、馬琴の性格な

り、生活なり、又、創作態度の上に、多分の共通性があると言つてよからう。この類似性に富んだ作家と、畫家とが共鳴したり、相提携して、この弓張月を出版した事は、この作の人氣の上に、確かに成功であつたといへるであらう。そこで、馬琴の人物に就いて、簡單に述べて置かう。

二　作者

弓張月の作者曲亭馬琴は、本姓を瀧澤、名を解、字を瑣吉といひ、通稱は佐七郎、佐五郎と呼ばれ、號も著作堂、飯臺などと多い。明和四年六月、深川の浪宅に生れたが、その家は生活が困難で、二十歳の時には、自活しなければならなくなつて居た。そこで東西に流浪して、或時は筆耕生活に、或時は書肆蔦重の傭人に、又は賣藥業者に、或は手習師匠に、なほ又、下駄屋へ入婿して、この人生を惡戰苦闘した努力の人である。この現實の世に、つくづく辛酸を嘗めて、且つ撓まなかつた所に、彼の體力の强健と、その精神の不屈が見えて、頼もしくもあり、又、それが同時に、彼の後半生に於いて、作家生活に成功した所以ともなつたのではあるまい。

か。かうした生活苦の間にも、精神的方面に煩悶があつて、醫學に或は俳諧に、又は、龜田鵬齋の學僕となつて、儒者たらうとしたが、偶々當時の一流作家たる山東京傳の世話で、廿日餘四十兩盡用而二分狂言(二冊、寛政三)といふ黄表紙を出して當つてからは、彼は小說の創作に向つたのである。この作は、深川永代寺にあつた壬生狂言が、評判であつたのに著想して、京傳門人、大榮山人の名で出版したのであるが、是は、彼の小說界に蹈み出した處女作である。爾來、嘉永元年十一月六日、年八十二で歿するまで、筆硯に親んで、その作三百餘種を物して居る。その精力たるや、實に驚嘆すべきであらう。殊に、その晩年は、兩眼の明を失つたに拘らず、彼が不撓の精神力は、口授する所を代筆させて、かの八犬傳や、美少年錄等の長篇傑作を、完成したのであつて、その努力の點に於ては、人の龜鑑として仰がれてよい人物である。

彼の創作には、黄表紙、合卷物、淨瑠璃、讀本さまざまあるが、最もよく、世人に知られて居り、且つ自負して居たのは、讀本であらう。讀本といふのは、繪畫本位の小說に對して、文章本位の稍高級な讀み物の意味であつて、その內容も、從來の浮世草子のやうに、現實を題材とした寫實小說ではなくて、歷史や傳說から材料を採つた空想的、理想的、教訓的小說をいふ

のである。

さて、彼の讀本を見るに、その內容から分類して、敵討物、巷談傳說物、史傳物といふ三種になるが、傑れた作品は、史傳物に多い。こゝに史傳物といふは、過去の歷史に見えた英雄豪傑を主題として、その傳說を小說的に綴つた作品であつて、馬琴が最も力を注いだものであり、そして、他の作家の追從を許さないところの獨壇場であつたのである。こゝに取扱つた弓張月も亦、この史傳物に屬するのである。

三　題材

弓張月は、言ふまでもなく、爲朝の外傳であつて、正史ではない。保元の亂に於ける英雄、鎭西八郎爲朝の一代記ではあるが、それを、支那の演義小說に倣つて、超自然的に、非人間的に脚色したものが、この弓張月の五篇である。殊に、爲朝は、伊豆に於て自殺したと傳へられる史的事實を、舊說に據つて變更し、更に是を生かして、琉球の天地に活動させて居る。是は正しい史實ではなくて、傳說であり、空想であり、又、彼の理想でもあつたのである。爲朝

の如き一代の英雄が、その末路甚だ悲慘であつた點に、彼は同情して、その大業を琉球といふ未見の地に成就させたものであることは勿論だが、他面、彼の理想を實現させるに都合のよい文獻もあつたのである。それは、神社考、和漢三才圖會、並に元史類篇や、中山傳信錄等である。馬琴は、是等に見える傳說を根據として、爲朝が琉球に渡つたものとして、彼の空想なり理想なりを、實現させたのである。そして彼は、この琉球に於ける舞臺に、力瘤を入れて描いて居る。從つて、量の上にも大半を割き、その文章も亦、特に意を用ひて、絢爛を極めて居る。そこに、爲朝外傳と、角書した所以も存するのである。かの前、後の二篇に見る史實に近い爲朝よりも、寧ろ、琉球の三篇に、多くの紙數を割いて、その結構の上にも、複雜性を持つて居ることは確實である。即ち、前、後の二篇は、部分的に言ふならば、平治物語や難太平記、又は雨月物語などに準據した點もないではないが、その大部分は、全く、保元物語の史實に從つて、是を敷衍したものであり、琉球の三篇は、中山傳信錄や南島志に材料を得て、是を水滸傳式に潤色し、空想化したものである。この琉球に關する歷史と地理とを調査して、是を精細に描寫した點は、馬琴が、他の作家と異つて、その學殖の豐富を示すものではあるが、そこに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c